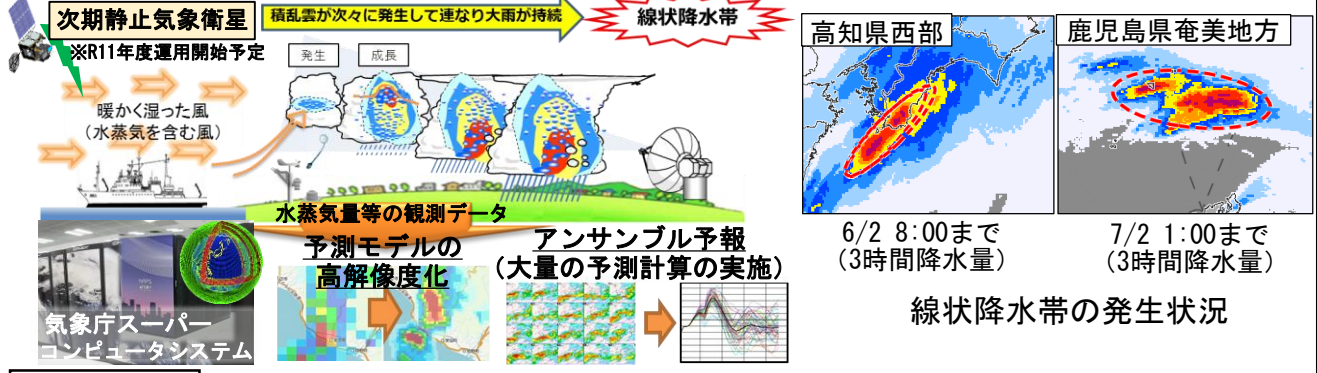


# 令和5年梅雨期の大雨等に対する国土強靱化の効果

○ 令和5年の梅雨期においては、梅雨前線の活動が活発になり、線状降水帯が発生するなど、各地で大雨となった。  
○ こうした災害において、これまでの国土強靱化の取組により、大規模な被害を抑制する効果が発揮されている。

## 線状降水帯に関する情報の発表

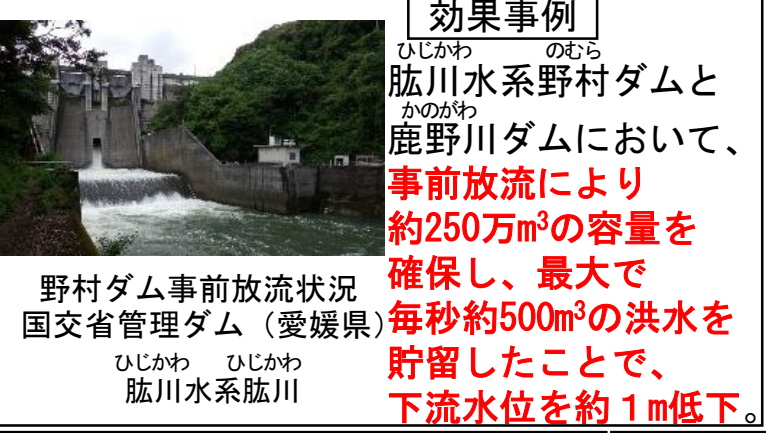
○ 水蒸気観測等を強化するとともに、気象庁スーパーコンピュータの強化等によって予測技術を高度化。線状降水帯に関する以下の情報提供を開始。  
・ 線状降水帯による大雨の可能性を半日程度前から呼びかけ。(R4.6開始)  
・ 線状降水帯の発生を、予測技術を活用し、最大30分前に発表。(R5.5開始)  
【R5年度梅雨期の発表実績】 半日前予測：3事例(8地域)、発生情報：29回(15県) ※7/18時点



**効果事例** 線状降水帯の情報を気象台から発表するとともに、気象台からホットライン等で危機感を自治体等に伝達。テレビ等で多数報道のほか、**気象庁HPに多数のアクセスあり。住民の避難行動・地域の防災対応等に寄与。**

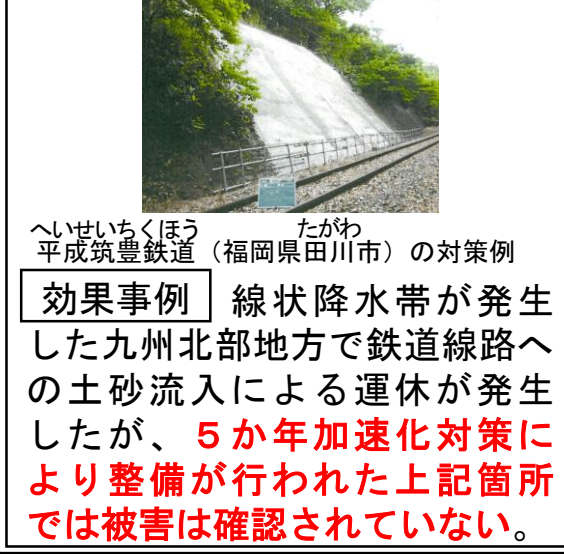
## ダムの洪水調節のための容量確保(事前放流)

【令和5年6月上旬の大雨】  
○ 事前放流したダムでの確保容量  
・ 55ダム [国交省所管ダム29ダム、利水ダム26ダム]  
・ 約1.5億 $m^3$ ※ [ハツ場ダム約1.7個分]  
※上記に加え、既に確保していた事前放流の容量 約4.7億 $m^3$  (61ダム) [ハツ場ダム約5個分]



## 鉄道隣接斜面崩壊対策

【令和5年6月下旬から7月上旬の大雨】  
○ 5か年加速化対策等により、鉄道隣接斜面の対策を実施。



## 浸水被害防止対策(河道掘削、堤防整備等)

【令和5年6月上旬の大雨、6月下旬から7月上旬の大雨】  
○ 3か年緊急対策、5か年加速化対策等により全国で河道掘削等を集中的に実施。

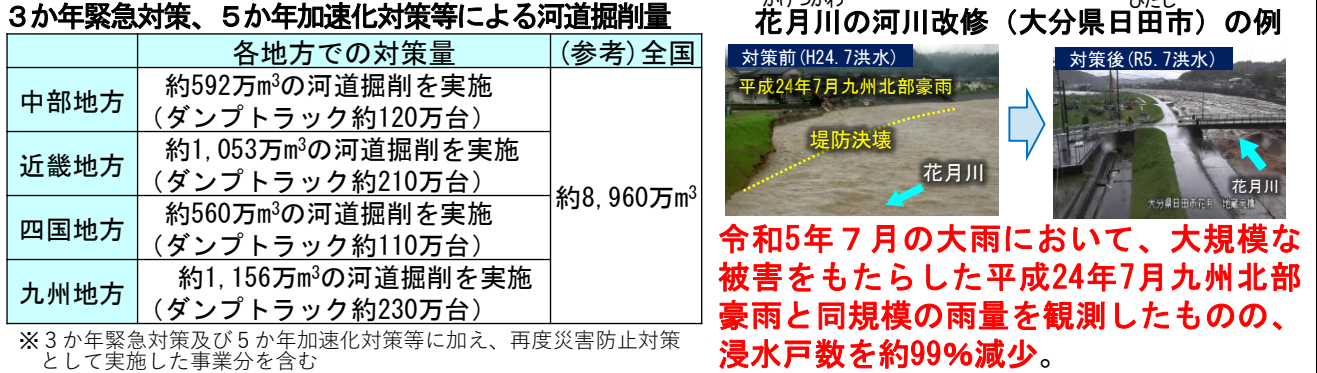
**効果事例** 河道掘削等により、**浸水被害を防止、または大きく軽減。**

令和5年6月上旬の大雨と過去に大規模な浸水被害をもたらした同規模の降雨による浸水戸数の比較

① 庄内川水系土岐川	【H23.9洪水】	622戸	→	【R5.6大雨】	2戸	(約99%減)
② 大和川水系大和川	【H29.10洪水】	258戸	→	【R5.6大雨】	43戸	(約83%減)
③ 紀の川水系和田川	【H24.6洪水】	116戸	→	【R5.6大雨】	0戸	(100%減)

令和5年6月下旬から7月上旬の大雨と過去に大規模な浸水被害をもたらした降雨による浸水戸数の比較

① 筑後川水系花月川	【H24.7洪水】	720戸	→	【R5.7大雨】	11戸	(約99%減)
② 山国川水系山国川	【H24.7洪水】	194戸	→	【R5.7大雨】	30戸	(約85%減)
③ 筑後川水系赤谷川	【H29.7洪水】	258戸	→	【R5.7大雨】	0戸	(100%減)



## 土砂災害対策(砂防施設の整備)

【令和5年6月上旬の大雨、6月下旬から7月上旬の大雨】  
○ 3か年緊急対策、5か年加速化対策等を活用し、全国で砂防施設の整備を集中的に実施。

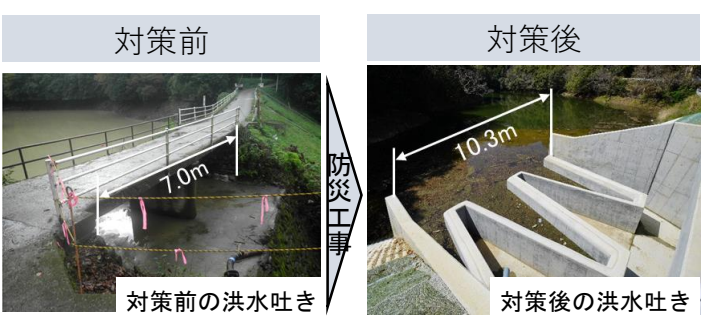
**急傾斜地崩壊防止施設の整備により、被害を防止**



**効果事例** 線状降水帯が発生した15県において、504件の土砂災害が発生したが、**3か年緊急対策や5か年加速化対策等により整備が行われた960箇所では被害は確認されていない。**

## 農業用ため池の防災対策(決壊等防止)

【令和5年6月上旬の大雨】  
○ 3か年緊急対策、5か年加速化対策等を活用し、緊急性の高い防災重点農業用ため池における防災対策を実施。



**効果事例** 6月上旬の大雨では、倉谷池における対策前の洪水吐きの対応可能な雨量を上回ったものの、**対策により流下能力を大幅に強化したことで、ため池の決壊による下流の農地・住宅等の被害を防止。**